夏目漱石

年　組　氏名〔　　〕

漱石の文学

千円札で有名な夏目漱石は、森鷗外とともに、明治・大正時代に活躍した日本近代文学史上不滅の大作家です。漱石は学者として出発し、初めは主としてイギリス文学を研究していましたが、東大在学中に正岡子規を知ってその影響を受けました。漱石の最初の小説『吾輩は猫である』は、その子規の門下生である高浜虚子が主催する俳誌「ホトトギス」に掲載されて評判になりました。以後、漱石は、名作『坊っちゃん』『草枕』などで小説家としての地位を確立しました。鋭い風刺、ユーモアあふれる書きぶり、反俗精神に満ちた作風で人気を博した漱石は、後年、東洋的な潔癖な道義観と西洋的文学から学んだ高度な近代的知性とに支えられて、『こころ』などの作品にみられる、人間存在の底に潜むエゴイズムの追求といった問題に取り組んでいきます。その作品がもつ近代的なテーマは、門下生をはじめ多くの後輩に引き継がれていきました。

〈略年譜〉

年号（西暦）	歳	事柄
慶応3（一八六七）	0	江戸牛込馬場下横町（現東京都新宿区）で誕生。本名金之助。
明治元（一八六八）	1	塩原家の養子となる。
11（一八七八）	11	東京府立一中に入学。
14（一八八一）	14	二松学舎（現二松学舎大学）で漢籍を学ぶ。
21（一八八八）	21	第一高等中学本科入学。夏目家に復籍。
22（一八八九）	22	正岡子規を知る。「漱石」という筆名を初めて使う。
23（一八九〇）	23	帝国大学文科大学（現東京大学）英文科に入学。
26（一八九三）	26	文科大学卒業。大学院入学。東京高等師範（東京教育大学、今の筑波大学）講師となる。
28（一八九五）	28	四国松山中学に赴任。
29（一八九六）	29	熊本第五高等学校に赴任。中根鏡子と結婚。
33（一九〇〇）	33	英国に留学。
36（一九〇三）	36	帰国。第一高等学校と東大英文科との講師になる。
40（一九〇七）	40	教職を退き、朝日新聞社に入社。胃腸病おこる。
43（一九一〇）	43	胃潰瘍のため入院・手術。療養先の修善寺で吐血、危篤状態となる。
44（一九一一）	44	文学博士辞退。
大正2（一九一三）	46	神経症・胃潰瘍再発。
3（一九一四）	47	胃潰瘍再発。
4（一九一五）	48	胃潰瘍悪化。
5（一九一六）	49	十二月九日、胃腸病悪化し、死去。

〈主な作品の紹介〉

吾輩は猫である

長編小説。雑誌「ホトトギス」に連載。漱石の処女作で、「吾輩」である猫が人間社会を批評するという新奇な形式と、全体にあふれるユーモアや風刺が世に迎えられた出世作。

〔あらすじ〕 生まれてまもなく捨てられた「吾輩」は苦沙弥先生の家に住みこむ。人間は不徳なものだと車屋の黒から教えられた吾輩は人間を観察する。主人の門下生寒月、美学者迷亭、詩人東風などは主人宅にやってきては太平楽を並べて語り、いろいろの人間模様が織りなされる。最後に、吾輩は水がめに落ち、南無阿弥陀仏を唱えて死ぬ。

〔書き出し〕 吾輩は猫である。名前はまだない。

どこで生まれたかとんと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめとした所でニャーニャー泣いていたことだけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間の中で一番獰悪な種族であったそうだ。この書生というのは、時々我々を捕まえて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考えもなかったから別段恐ろしいとも思わなかった。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。

三四郎

中編小説。「朝日新聞」に連載。純真な学生の不安や動揺、孤独、前途への漠とした夢を、故郷と学問と恋愛の三つの世界に表す。また、新しい女性像を描いて、後の現実的な小説への道を開いた作品でもある。

〔あらすじ〕 熊本の高校を出て大学へ入るために上京した小川三四郎にとって、見るもの聞くものすべてが驚きの種であった。彼のまわりには同郷の先輩野々宮、友人佐々木、「偉大なる暗闇」広田先生、里見美弥子らが現れる。三四郎は美弥子に心ひかれるが、彼女は女性のなぞを感じさせたまま、常識的な結婚をする。

こころ

中編小説。「朝日新聞」に連載。上「先生と私」、中「両親と私」、下「先生と遺書」の三編からなる。「『死』に至る人間の心の過程」を主題とし、「エゴイズムと罪」の問題を提起する。

〔あらすじ〕 大学を卒業して帰省した私のもとに、先生から遺書が届く。先生は学生時代、未亡人と美しいお嬢さんのいる下宿に、困窮していた親友のKを同居させた。Kからお嬢さんへの恋をうち明けられて驚き、Kをだし抜いて奥さんからお嬢さんとの結婚の許しを得る。それを知ったKは自殺する。結婚した先生はKの幻影に苦しみ、罪の意識から孤独感がつのり、Kの心を深く理解して自殺を決意する。

坊っちゃん

中編小説。「ホトトギス」に発表。一人称（おれ）で書かれた文体と、その話のおもしろさの中に清新な反俗精神のこもる作品。

〔あらすじ〕 単純で率直な、江戸っ子のおれ（坊っちゃん）は、物理学校を卒業し、四国の中学校の数学教師になる。おれの奔放な言動は、生徒や同僚の教師たちの間にいろいろな事件をまき起こし、またまきこまれる。周囲の愚劣・無気力・悪知恵におれは反発し、先輩教師の山嵐とともに、悪玉の教頭赤シャツらに鉄拳制裁を加え、教職をなげうって東京に帰る。

〔書き出し〕 親譲りの無鉄砲で子供のときから損ばかりしている。小学校にいる時分学校の二階から飛び降りて一週間ほど腰を抜かしたことがある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかもしれぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、いくら威張っても、そこから飛び降りることはできまい。弱虫やーい。と囃したからである。